

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会様

第8回 男鹿半島・大湯ジオパーク全国大会参加報告書

2017年11月2日

洞爺湖・有珠火山マイスター

江川理恵

記

標題の件につきまして、特に印象的だったことについて報告いたします。

1. 全体会

- ・ 日時 10月25日 13:00~17:00
- ・ 場所 男鹿市民文化会館

(1) 基調講演 14:30~15:20

演題「ジオパークを楽しく料理しよう！～キッチン火山学～」

講師 秋田大学 林信太郎氏

自ら弁当作りをされるという林先生は、お菓子作りもお得意だそうである。

実験室は文字通りにキッチン。

そこで日常的に料理をする中で、火山の現象と良く似た現象を発見すると言う。

その発見された料理中の現象を、子供たちに分かり易く楽しく紹介する授業を実践されている。

書籍やテレビ等で拝見したことはあったが、各種実験をパワーポイントで見せ、軽快でユーモアのある語り口調は、間違いなく子供たちの心を捉えると思った。

まずは楽しいと思わせる。

次に考えさせる。

そして興味を持たせる。

さらに深く考えさせる。

そのプロセスが子供たちの地球への興味になっていくのだろう。

「火山を入り口に生活に密着したところから地球を考えさせる」という誘導は、子供たちを無理なくジオへの関心につなげることができる。

50分間はアッという間で、林先生の小学校に通いたいとさえ思った。

(2) パネルディスカッション 16:00~17:15

タイトル 「ジオパークを教育に活用する視点と地域の明日への投資」

・ コーディネーター 林信太郎氏

・ パネリスト

河村教一氏 秋田大学教育文化学部教授

中田節也氏 東京大学地震研究所教授

山本隆太氏 静岡大学教職センター学術研究員・JGN 教育 WG リーダー

成田弘美氏 むつ市芝生小学校教諭

小島千晶氏 むつ市芝生小学校教諭

各パネリストより様々な事例報告がなされたが、何と言っても むつ市芝生小学校の取り組み報告には感動した。

芝生小学校では、子供たちに次のようなことを目的に「ジオパーク学」を総合学習の中にカリキュラム化した。

- ・ 自分の住む町の地域資源・足元を知ることによって地域の素晴らしさを知る。
- ・ 自分の住む町に誇りを持つことができる。
- ・ 自分の住む町の素晴らしさを伝えることができる。
- ・ 伝えるということで、コミュニケーション能力が育つ。
- ・ 伝えたことで、自分の住む町の素晴らしさを認められると、自己肯定感を生む。
- ・ 子供たちが主体性を持って物事に取り組む。
- ・ 子供たちが郷土愛を持って、逞しく生きる力を育てる。

教室内での授業はもとより、フィールド学習・給食・修学旅行・プレゼンテーションなどの活動を通して、目標を着々と達成して行く中で、日本ジオパークの認定も受けたそうだ。

この時に、むつ市長からの感謝の言葉「君たちのお陰で認定を受けた。どうもありがとう。」この言葉に、子供たちはどんなに自信が付き、生きる力をもらったことか！この取り組みは、是非、全国の小学校で真似て欲しいと思う。

ジオパーク学習は未来への投資として人材育成に繋がる！と確信した全体会だった。

(3) 分科会

タイトル 「ガイド技術を考える～インタープリテーションの視点から～」

日時 10月26日 9:00~12:00

場所 男鹿観光ホテル

・ 第一部 「ブラタモリ出演者 トークセッション」

司会 西谷香奈氏 伊豆大島 GP

出演者

蓮岡真氏 磐梯山 GP

鈴木雄介氏 伊豆半島 GP

市橋弥生氏 佐渡 GP

西谷「タモリさん案内するのに工夫したことは？」

鈴木「キッチン火山を使い、スタッフの理解を深めた」

市橋「金をテーマにフィリップを使ってアナウンサーにも分かるように説明したが、放送では没だった。」

蓮岡「“磐梯山は宝の山”と“たもてばこ”のテーマを作った」

西谷「番組にかかわる中でジオガイドとして役立つことは？」

鈴木「もの凄い量の取材をするので、こちらでも凄く勉強できる。100位の地域資材を集めて95捨てる。残りの5つについて科学的根拠も含め、徹底的に調べる。この作業はガイド活動でも取り入れたい。」

「“たもてばこ”を元にタモリさんが興味を持つように仕向けるという技を工夫する行為は、あくまでもお客様が主役であるということを再認識させてくれた。」

市橋「ガイドが喋りすぎず、あくまでもお客様主体で進めることが大切だと学んだ。」

「落としどころに持って行くための伏線張りの工夫は必要。すぐに答えを言わない事も大事。」

蓮岡「待つ姿勢が大切だと再認識した。」

「発見の楽しみを相手に譲ることで、よりコミュニケーションがとれることに気付いた。」

古瀬(第2部の講師)「放送を見ることで、自分のガイドを客観的に見る事が出来るのは大きな成果。」

西谷「撮影中の苦労話は？」

フリー「こちらの意図とは反するタモリさんの興味・関心の動きに、用意したことが計画通りに行かなかったことが多かった。」

「タモリさんが楽しむことが大切なので、とにかく思った通りにいかなかった。」

「こちらが話そうとしたことをタモリさんが全て話してしまう場面もあったが、それは“有り”で進んで行く。」

西谷「アナウンサーの方の役割について気付いたことは？」

鈴木「タモリさんとの掛け合いがあまりにも専門的になったとき、視聴者を置き去りにしないために近江さんがストッパー役になった。」

市橋「近江さんは一般代表としての立ち位置。近江さんが分からなければ、視聴者も分からないという基準になっている。」

蓮岡「近江さんも参加者のひとりとしての扱いをしたが、投げかけの仕方は差別化した。近頃は、近江さんとタモリさんとの掛け合いも増えたようだ。」

西谷「放送後の反響はどうか？」

鈴木「放送されたものと同じ、“ホテルのダイニングから見えるジオサイトを見る”というホテル主催のジオツアーができた。」

市橋「ジオパークと全く関係のない団体がジオツアーを開催した。」

蓮岡「タモリさんが感動したジオサイトを地元の人は知らなかった。地域に自信を持って良いと再認識し、活力が湧いた。」

会場からの質問「番組的に不味い仕掛けはあったか？」

鈴木・市橋「“特別な許可を得て入っています”というテロップで配慮するが、一般の人の生活に影響が出ることは控えるべき。」

* 感想

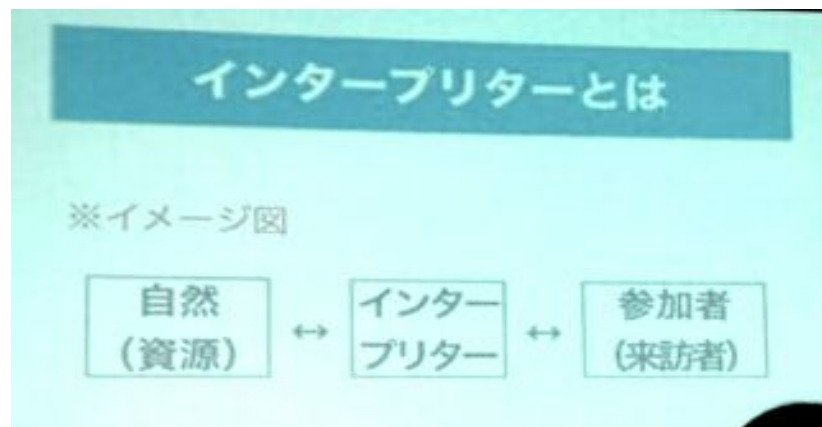
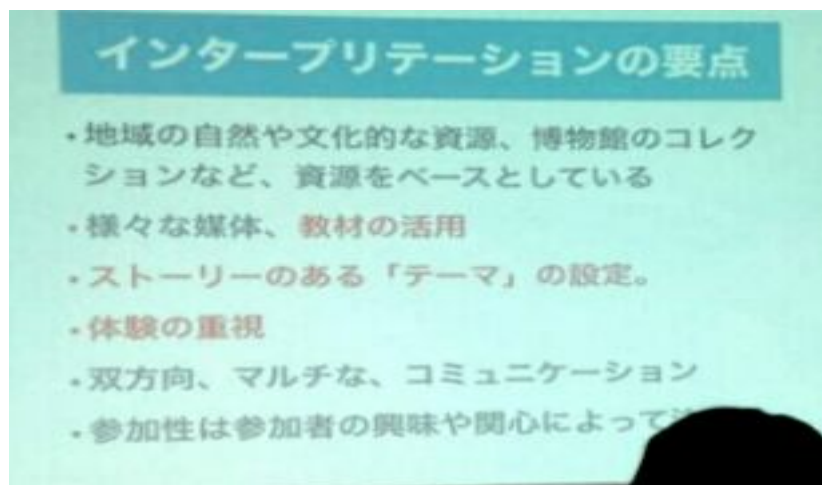
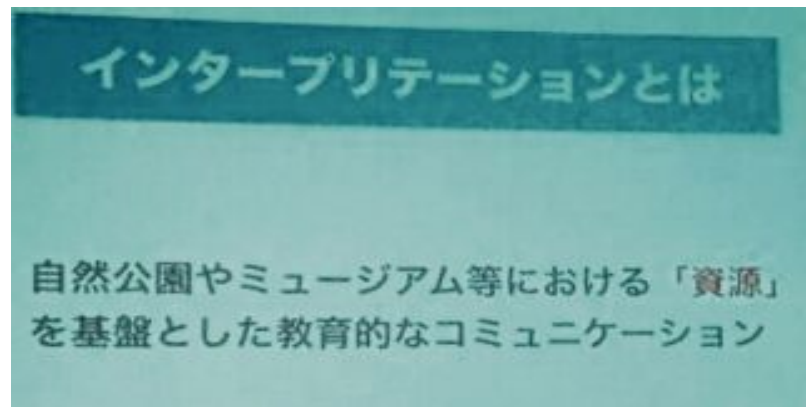
洞爺湖編が4日に放送されるが、撮影の裏側が興味深かった。

個人あるいは少数のお客様のガイドをする時の参考になる話が多かった。

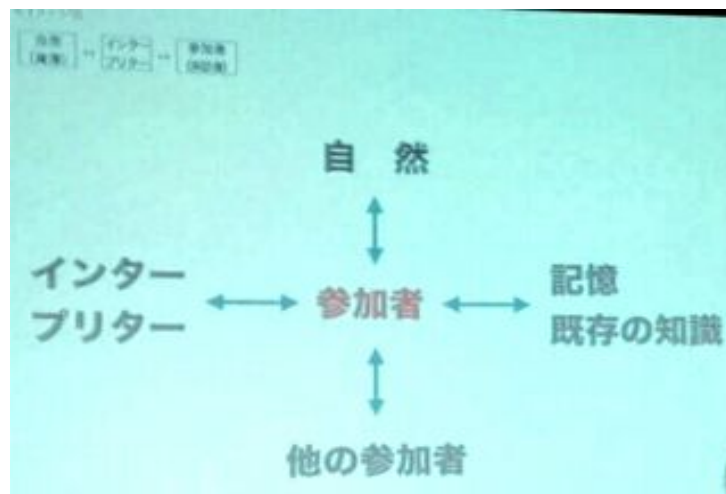
ガイド中、偶然にも西山山麓火口群の撮影に出会ったので、その部分が気になるが、横山先生のガイドとともに、放送後の反響が楽しみだ。

- ・ 第二部 インタープリテーション協会代表理事・帝京科学大学教授 古瀬浩史氏による講義とワークショップ

講義の部分はパワーポイントの画像参照。



参加者を中心とした双方向あるいは、参加者同士の他方向コミュニケーションで繋いでいくのがインタープリターの役目。



ガイド技術を考える ―インタープリテーションの視点から―

【開催趣旨説明】
ガイド技術の向上は、ジオパークのブランド化に欠かせない重要項目です。2年前のジオパーク全国大会in奈良でジオガイド300名で決めた「理想のジオガイド像2015」では、参加者からインタープリテーションに関する質問をたくさん頂きました。この技術をマスターすると、特別なガイドコースや珍しい生きものを探さなくても、いつの季節も天候を問わず、お客様もガイドも楽しめます。このような経緯から、今年の全国大会ガイド分科会の一つとして取り上げました。

【今日の展開】

第1部：インタープリテーションを上手に取り入れている番組が、NHK総合の「プラタモリ」です。見ている人も飽きさせず、ガイド役の専門家と一緒に、各地の地形・地質と関連する文化・歴史を伝えています。まさに、これから目指したいジオガイドの姿です！今回は「プラタモリ」に出演した専門員の方々に、ジオガイドに応用できるポイントなどを伺います。

第2部：第1部を受けて、日本のインタープリターを代表する、奈良科学大学教授の古瀬浩史先生に講演をお願いし、インタープリテーションの魅力をワークショップと合わせて伝えて頂きます。インタープリテーション技術をマスターして頂き、ジオガイドの幅と深みを増して下さい。

第3部：大会宣言の「キーワード」を決めます。

ネイチャーガイド（インタープリター）は、世間一般が考えている意味の“ガイド”とは違うし、教師でもない。ネイチャーガイドが、情報やある種の教育的要素を持っているのは事実だ。ただネイチャーガイドの仕事は、自分たちの経験から言えることだが、知識や情報を与えるというよりは、興味を刺激し啓発するという要素のうが強い。（イーノス・ミルズ）

「テーマ」と「トピック」の違い。
混同して使われがちであるが明確にするべき。

テーマ(Themes) :

来訪者に持ち帰ってほしいメッセージ、
参加者と共有したいストーリーを、
短い文章で簡潔に記述したもの

「テーマ」は、パンフレットを作るときなどに重要である。CMに代表されるように、ストーリー性があると、時間が少なくても伝える（伝わる）ことができる。

テーマ(Themes) :

来訪者に持ち帰ってほしいメッセージ、
参加者と共有したいストーリーを、
短い文章で簡潔に記述したもの

講義は以上。

次にこれらを踏まえてワーク。

ワーク① 4枚の紙芝居を利用した自己紹介と、何故自分はこの分科会に居るのかを絵や文字で説明する。

～例えば

「北海道の伊達市から参りました、江川理恵です。伊達市は海の近くで、有珠山の麓にあります。」

1 枚目…野原や海や川や山で、生き物を捕まえたり、花を摘んだりして外で遊ぶのが好きな子供時代でした(絵あり)。

2 枚目…大人になっても、自然に親しむ遊びが好きで、登山・スキーなどをして余暇を楽しみました(絵あり)。

3 枚目…有珠山を火山として見るようになってから、深く有珠山を好きになってしまい、洞爺湖有珠火山マイスターとなりました(絵あり)。

4 枚目…それまでもガイドとして働いていましたが、火山マイスターとなり、より活動の場が増えました。人と自然をより良い関係に繋ぐためのお手伝いをしたく、インタープリテーションを学びに参りました(絵あり)。

～という具合に、絵を交えながら4人が自己紹介をする。

このワークのねらい～

- ・ここに居る経緯を伝えることで、その人の背景も知ることができる。
- ・紙芝居という小道具を使うことで、視覚に訴えることができ、より印象付けられる。
- ・定型の名刺交換よりも感情が入り、親しみがわく。
- ・その後のコミュニケーションが取り易くなる。

ワーク② 「ドンダリの芽と根はどのように出るか？」

笠の取れたドンダリから芽と根がどのように出るか、それぞれに描いてみる。

その答えを探しにフィールドに出てみる。(この時は外へは出ず、答えが描き入れられた。)

このワークのねらい～

“体験” させる。

言葉だけの印象づけ、あるいは学習よりも、体験することでより深く印象づけ・学びを深めることができ忘れない。

* 感想

今年は、色々な行事に参加して「インタープリテーション」について学んだので、よい復習ができた。

参考になることが多く、今後のガイド活動に生かしていきたいと思う。

(4) エクスカーション 10月26日～27日

参加ジオツアー「白神の神秘を巡る！～白瀑神社と十二湖めぐり～」

“白神山地と人々の営み”をテーマとし、地形が地域に住む人々の進行の対象になった「白瀑」や地震・地滑りがもたらした恵みともいえる「十二湖」を巡り、多様性豊

かなジオ・エコ・カルチャーを楽しむコース。紅葉まっさかりで、十二湖は息をのむ
美しさだった。

秋田弁のガイドも楽しませていただいた。

椿海岸の柱状節理も美しく、初めて柱状節理の上を歩いた。

白瀑神社では、能代高校の理科部の生徒さんたちがガイドをしてくれた。

神社と瀑という地味な所を、しっかりと調べて、きちんと話してくれる姿に感動した。

以下写真にて～

途中、めったに出会わないという遮断機が下り、五能線の列車が通った。



こちらも鉄橋を渡る五能線。この近くに撮り鉄のためのパーキングがある。



以下 7 枚、紅葉の十二湖





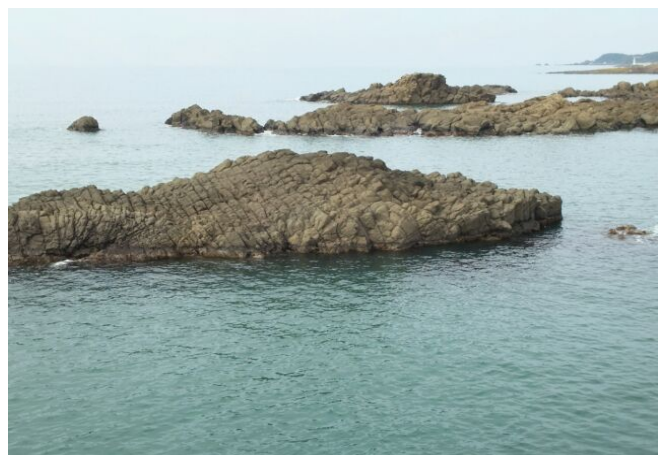
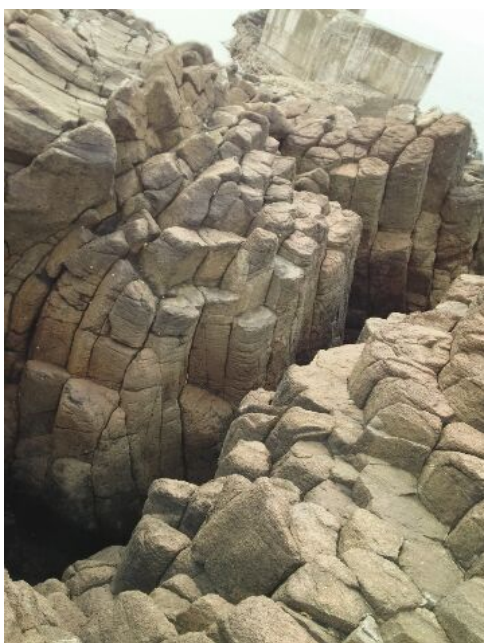
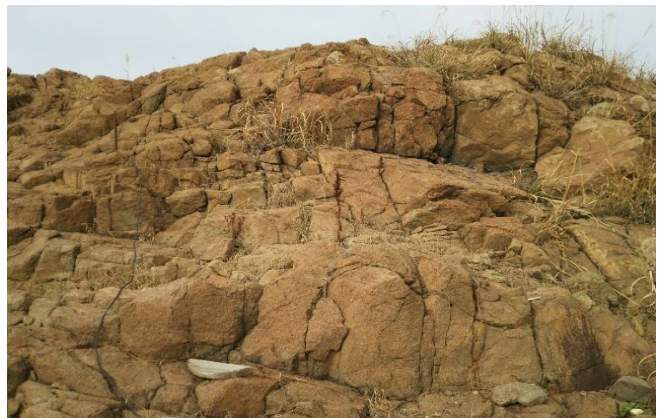
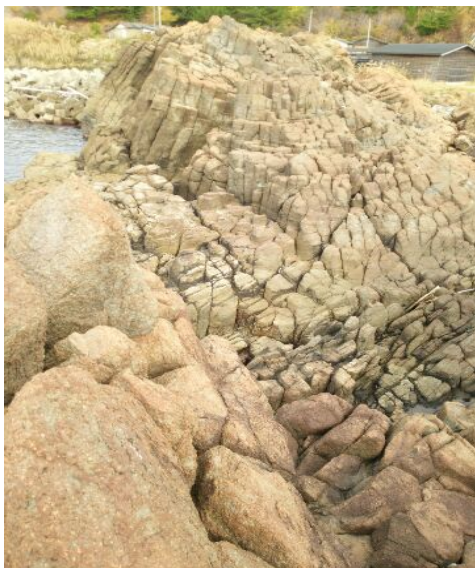
日本キャニオンと呼ばれる崩山。
この地滑りで十二湖ができたと推定されている。



八森椿海岸柱状節理群

この溶岩流は、藤里町から八森町にかけて分布している素波里安山岩。
岩帯は、長さ約 94m 幅 16m にも及ぶ。上にのぼり歩いてみた。柱の断面を見ると五角形や六角形をしており美しかった。
防波堤の一部に柱状節理の岩帯が利用されているのが興味深かった。

以下写真にて～

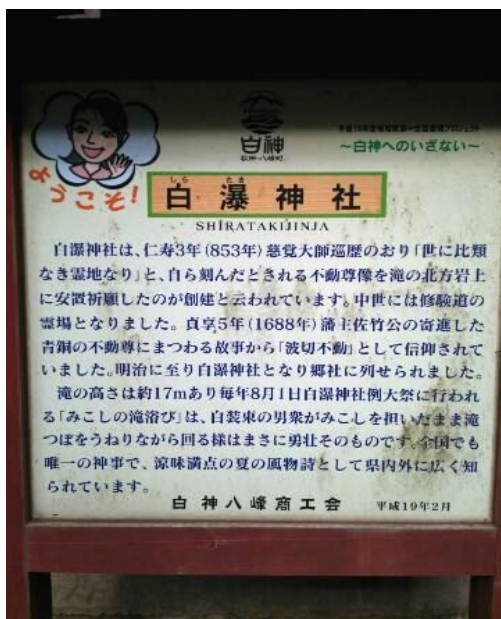


白瀑神社 ～八森町

白瀑神社は円仁の開基で、仁寿3年この社に詣でて不動尊を彫刻し、瀑の北方の岩の上に安置し国土安全を祈願したとされている。

ここでは、能代高校の理科学研究部の生徒さんたちがガイドを務めてくれた。順番に原稿を読む形ではあったが、インターネット情報からのコピペではなく、書物や聞き取りで書かれた原稿だとのことで、聞くものの心に届くものだった。

以下写真にて～



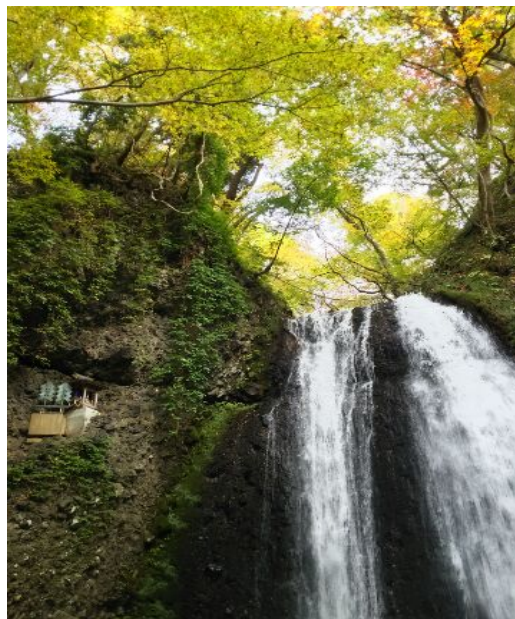
緊張しながらも真面目に臨んでくれた生徒さんたち。



写真も交えた丁寧な説明。質問にもしっかりと応えてくれた。



落差 17m の白瀑。見えにくいですが上部 U 字型の部分に縄がかかっている。



* ツアーを終了しての感想

最後の秋田駅には比較的早く到着したが、どのバスから降りてくる参加者も皆満足げな表情だった。私が参加したツアーもそうだったが、全身全霊でもてなそうとしてくれている様子を感じ本当にありがたかった。大会そのものもそうだが、秋田県内の4つのジオパークがタッグを組み、全県上げて取り組む姿に感動したツアーだった。

＊ 第8回日本ジオパーク全国大会 2017 全体を通しての感想

昨年に引き続いて2度目の参加だった。初めての伊豆半島大会では、全てが「初」ばかりで、ドキドキ・ソワソワ・キョロキョロといった具合で落ち着かなかったが、今年は、ワクワク・フムフム・なるほど！・そうか！といった具合に、色々なプログラムを頭で消化しながら進んでいくのを実感できたのは、自分の中の大きな変化だった。

上述したように、「全国大会を成功させよう！」とする全県上げての取り組みは、空気感でひしひしと伝わって来た。特に感動的だったのは、全体会でプロ並みの司会を務めていた高校生や、白瀑神社をガイドしてくれた高校生、手紙をくれた小学生など、子供たちの力の大きさだ。ジオパーク学習の成果をここにも見た気がした。

来年のアポイ岳ジオパークにおける全国大会もこうありたいと感じた。北海道全体で盛り上げられるよう、私も積極的に協力したいと思う。

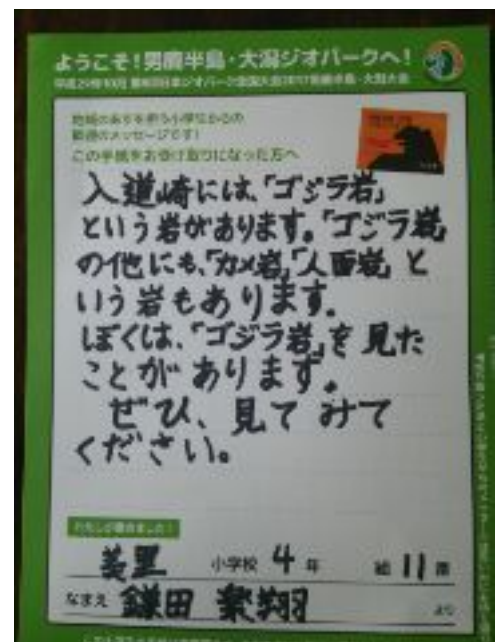
充実の3日間を過ごさせていただいた。大会に関わった全ての皆様、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会の皆様、同行した仲間の皆様、全ての方々に心から感謝したい。

最後に、とっておきの写真を二枚掲載して報告を終える。

日本ジオパーク創設の母である矢島道子さんと2ショット。



県内の子供たちが全員に手紙を書いてくれた。



以上